

---

# 領主様に下された天罰

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

領主様に下された天罰

### 【Nコード】

N9852E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ドイツのお話。我儘な領主様に皆大弱り。そんな領主様に起こったことは。

## 第一章

### 領主様に下された天罰

古い古い、私達のお爺さんやお婆さんが小さい頃に長老から聞かされた、それよりもまだずっと古い時代のドイツのお話です。

ドイツのある街にオットーというお殿様がおられました。お殿様はとても広いお屋敷と土地に大勢の召使い、それに兵隊さん達を持つていてとても力のある人でした。皇帝陛下の側近でもあり国で逆らえる人はまずいませんでした。

そのせいでとても我儘でした。どれだけ我儘かというとかかとうと御大層に物々しく大勢の人を着飾らせて外出して御飯もいつも食べきれない程の御馳走ばかりで広いお屋敷の他に別荘を幾つも持つていてそういったものを全て好き勝手に使っていたのです。服だつてわざわざ注文して絹で作らせて少しでも気に入らないと怒鳴つてしまうのです。

「この役立たずが！」

これが領主様の決まり言葉でした。

「わしが何か言えば御主なぞこれだぞ」

こう言つて首を切る動作をしてみせます。御飯だつて美味しくないとすぐにテーブルを蹴飛ばしますし起きる時間も寝る時間も何処かへ到着する時間も全部お殿様の思い通りです。教会に行く時間もそうです。

本来は教会の行事には皆決まった時間に集まつて決まった時間に行うのです。ところがお殿様の我儘でいつもお殿様が来てからやることになっています。

「わしが来るまで待つておれ」

これもまた我儘です。皆何があつても教会で待つていなければならぬのです。暑くても寒くても。皆お殿様の我儘にはうんざりですがとても偉い人なのでどうすることもできませんでした。

「困ったことだ」

「本当に」

教会の神父様も領地の人達も頭を抱えています。誰も何も言えません。言っても聞かないし言えばそれこそ何をされるかわかりません。だから言えないのです。

そんな我儘が続いたある日のこと。教会での行事で皆が集まっているのですが肝心のお殿様が来ないので。皆それでいらいらするわ困るわで大変なことになっていました。

「困ったな、これから畑仕事の続きがあるのに」

「隣村に行った子供を迎えに行かないと」

皆それぞれ用事があるのです。しかしそれでもお殿様は来ません。たまりかねた神父様はここで遂に決心しました。行事を行うことにしたので。

「はじめましょう」

「えっ、神父様」

「いいのですか？」

皆驚いて神父様に尋ねます。

「若しお殿様が来られたら」

「その時はどうなるか」

「来られない場合もあるからな」

今回もそうではないのかとも考えていたのです。とにかく我儘で気紛れなのです。つばかして遊ぶこともあったのです。本当に困った人だったのです。

「だから。やはりここは」

「では。はじめよう」

「左様ですか」

「ですが若し来られた時は」

「その時は私が引き受ける」

神父は言っのだった。

「責任を持つから。はじめよう」

「ですが若し来られたら」

「その時は」

「その方等は心配しなくていい」

若しお殿様が来られたその時はどうなるか、脅える村人達に対し  
て彼等の心を安心させる為にとても優しく穏やかに話をしています。  
「神にお仕えする私がいるからな」

「ですか」

「でしたら」

「うむ。それにもう我儘には付き合っておられん」

紛れもない本音でした。白く長い髭が目立つその顔を困ったもの  
にさせての言葉です。

「お殿様のな。いい加減な」

「ですが逆らったら」

「これですし」

村人の中の一人が首を切る動作をします。お殿様が何かあると言  
うから皆わかってるのです。

## 第二章

「まさか神父まではその様なことはされまい。安心せよ」  
「はあ」

村人達は恐怖と不安に脅えながら神父様がはじめられた行事に加わるのでした。暫くは何事もなく平穩に行われましたがやがて。教会の外からとんでもない怒鳴り声が聞こえてきました。

「開けよ！」

「あの声は！」

「来た！」

皆すぐにわかりました。お殿様の声でした。

「開けぬとその扉を斧で叩き壊すぞ！」

「し、神父様！」

「来ました！」

村人達は行事に加わるのもよそに慌てて神父様に言います。皆席を立てて神父様と十字架にかけられている主にすがらんばかりです。

「大丈夫ですよね、本当に」

「大丈夫、例え何があっても」

「もう許さん！」

またお殿様の声が聞こえてきました。

「この扉なぞ不要だ！むん！」

「なっ、まさか！」

「教会の扉を！？」

「わしの邪魔をする扉なぞ不要！」

またとんでもないことを言っています。ですがもつとんでもなかったのはお殿様の今の行動でした。何と本当に斧で教会の扉を叩き割ったのです。ついでに金鎚まで振り回して扉を粉々してしまつて。そのうえで教会の中に乗り込むのです。手には大きな斧と金鎚があつてそれを両方共肩に担いでいます。黒くてとても濃い髭と

一緒に物凄い迫力を出しています。

「誰が行事を行ってよいと言った！」

皆の恐れていた通りでした。やっぱりお殿様はこのことを聞いてきました。

「わしが来るまではじめてはならぬ筈。違つか」

「そ、それはその」

「つまりですね」

「ふん、どのみち御主等ではないのはわかっておる」

脅えてガタガタと震えているだけの村人達は少し見ただけでした。その目は神父様に向けられています。剣呑な目をじっと。そうして向けてきています。

「神父よ、御主だな」

「如何にも」

神父様は逃げませんでした。堂々とお殿様に答えます。

「その通りでございます」

「命は惜しくないのだな」

その恐ろしい目を向けながら神父様にまた問います。

「わしに逆らつて。どうなるか」

「何か為されたいのならは為されるがいいでしょう」

しかし神父様はもう覚悟を決めていました。今更にお殿様に言われなくても脅えたりはしません。それどころか脅されて余計に奮い立つ程でした。

「ですが若し何かされればその時は」

「その時は。何じゃ」

「神の天罰がお殿様を襲われることでしょう」

「面白い、天罰か」

お殿様はこう言われても平気です。天罰と聞いても笑うだけでした。その口を大きく開いて。人の頭が入ろうかという位大きな口になっています。

「ならば今すぐ見たいものだ。その天罰とやらを」

「そのおつもりなら好きなようにされて下さい」

覚悟を決めている神父様はなおも言います。

「貴方のお好きなように」

「ふん、言われずともだ」

半分は売り言葉に買い言葉でした。お殿様は言います。

「この金鎚で貴様の頭を叩いて教えてやるわ。覚悟せよ！」

叫んで金鎚を振り上げたその時です。何と突然物凄い音が教会の音から聞こえてきました。

「！？一体何が」

「あれは雷の音」

「馬鹿な」

お殿様もその音を聞いています。聞いたうえで思わず顔をそちらに向けたのです。

「今まで晴れておったぞ。それがどうして」

「だ、旦那様！」

「大変です！」

ここでお殿様が壊したその扉から兵隊さん達が飛び込んできました。お殿様が抱えておられる兵隊さん達です。



### 第三章

「突然空が曇り」

「雷が鳴り響き」

「何と」

お殿様もこれには驚きです。何しろ今さっき、教会に殴り込むその時まで空には雲一つなかったのですから。驚くのも当然です。

「まさか。では」

「そうです。雷が次々に落ち」

「しかも」

「しかも。どうしたのじゃ」

「屋敷の方に落ちました」

「屋敷というと」

お殿様は兵隊さん達の話聞いてすぐに察しました。そのお屋敷が何処なのかを。

「わしの屋敷が」

「すぐに戻りましょう」

「若しかしたら雷で」

「う、うむ」

狼狽しながら兵隊さん達の言葉に頷きます。

「わかった。それでは」

「はい、それでは」

「今すぐに」

「神父よ」

去る時になって。忌々しげに神父様を見て言います。

「命拾いしたな」

しかしその言葉と共にまた雷が落ちます。何はともあれお殿様は雷が次から次に落ちる中を贅沢な八頭立ての馬車で急いでお屋敷に戻ります。するとお屋敷は。

見事な彫刻で飾られた門も綺麗なお庭もそのままでした。ですが立派なお城みたいなお屋敷だけは燃えて赤くなっていました。炎がお空に届きそうなばかりです。

「まさかとは思ったが」

「だ、旦那様」

「よくぞ戻られました」

馬車から降りて呆然とするお殿様。そこに家族や使用人達が急いでやって来ました。そのうえでお殿様に対して声をかけるのです。

「雷が続けて落ちてきて」

「それで」

「こうなってしまったのか」

「はい」

お殿様に対して答えます。

「その通りです」

「今御覧になられている通りです」

「馬鹿な」

まだ呆然となっていて呟きます。

「この様なことになるとは」

「ですが宝物は全部運び出せましたし」

「家の者も皆何とか」

「無事なのだな」

「はい、そうです」

口々にお殿様に答えます。

「皆何とか」

「助かりました」

「そうか。皆無事か」

「旦那様」

ここで一番古くお殿様に仕えている年老いた執事さんがお殿様に言ってきました。

「何じゃ」

「これは神様のお知らせではないでしょうか」

「お知らせだと」

「はい。思い当たるふしはありませんか」

「思い当たるふし」

こう言われると次から次にと沸いて出てきます。これまでの自分の行いが。思い出せば思い出す程恥ずかしくなってくる程です。それでももう恥ずかしくて死んでしまいたくなる程でした。

「………ある」

「左様ですか」

俯いて答えるお殿様。執事さんはその言葉を受けて応えました。

「ではそれは」

「うむ。それは」

「以後は慎みましょう」

こうお殿様に言うのでした。

「そうしなければまた雷が落ちて今度は」

「もっと酷いことになるな」

「そうです。だからこそ」

穏やかに。お殿様に添うようにして言います。

「これからは」

「わかった」

俯いたまま執事さんの言葉に頷きます。

「それではな」

「御願います」

それからお殿様は心を入れ替え思いやりがあり質素な生活をする穏やかな人になりました。すると人々はそんなお殿様を慕うようになり何時しかお殿様はそのことに喜びを覚えるようになりました。全てがよく変わっていつて贅沢や我儘よりも素晴らしい喜びがあることがわかったのです。

雷によって変わったお殿様、古い古い、お爺ちゃんもお婆ちゃんも小さい頃に長老さんからも聞いていない、そんな昔のお話。これ

で終わりです。

領主様に下された天罰

完

2008・5・1

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9852e/>

---

領主様に下された天罰

2010年10月8日15時04分発行